竜王北小学校いじめ防止基本方針

1 いじめ問題に関する基本的な考え方

(1) はじめに

いじめは、決して許される行為ではない。しかし、いじめはどの子供にも、どの学校にも起こりうることであり、どの子供も被害者にも加害者にもなり得る事実を踏まえ、学校・家庭・地域が一体となって、未然防止・早期発見・早期対応に取り組まなければならない。

いじめは、いじめを受けた児童生徒の心身の健全な成長に重大な害を与え、その生命又は心身に危険を生じさせる恐れがある。すべての児童生徒がいじめを行わず、いじめを放置せず、いじめが心身に及ぼす影響を理解する必要がある。

いじめ問題は、校長のリーダーシップのもと、学校全体で組織的に進めていく必要がある。学校全体でいじめ防止と早期発見に取り組むとともに、いじめが疑われる場合は、適切かつ迅速にこれに対処し、さらにその再発防止に努めていく。

とりわけ「いじめを生まない学校づくり」を目指し、教育活動全体を通して自己有用感や自己肯定感を育み、好ましい人間関係づくりや豊かな心の育成のために日々取り組んでいく必要がある。

「いじめ防止対策推進法」（平成 25 年 9 月 28 日施行）13 条の規定及び国のいじめ防止等のための基本的な方針に基づき、本校におけるいじめ防止等のための対策に関する基本的な方針を策定した。

(2) いじめの定義

「いじめ」とは、児童等に対して、当該児童等が在籍する学校に在籍している等当該児童等と一定の人的関係にある他の児童等が行う心理的又は物理的な影響を与える行為（インターネットを通じて行われるものを含む。）であって、当該行為の対象となった児童等が心身の苦痛を感じているものをいう。（いじめ防止対策推進法 2 条）

また、けんかやふざけ合いであっても、見えない所で被害が発生している場合もあるため、背景にある事情の調査を行い、児童生徒の感じる被害性に着目し、いじめに該当するかどうかを判断するものとする。

(3) いじめに関する基本的認識

「いじめ問題」には以下のような特質があることを十分に理解して、的確に取り組むことが必要である。

- ①いじめは、人間として決して許されない行為である。
いじめは許されない、いじめる側が悪いという毅然とした態度を徹底する。
いじめは子供の成長にとって必要な場合もあるという考えは認められない。
- ②いじめは、どの児童にも、どの学校、どの学級にも起こりうることである。
- ③いじめは、大人が気づきにくいところで行われることが多く発見しにくい。
- ④いじめは、様々な態様がある。
- ⑤いじめは、いじめられる側にも問題があるという見方は間違っている。
- ⑥いじめは、教職員の児童観や指導の在り方が問われる問題である。
- ⑦いじめは、単に謝罪をもって安易に解消とすることはできない。いじめが止んでいる状態が相当の期間継続するまで、注視し続ける。また解消後も注視が必要である。
- ⑧いじめは、学校・家庭・社会など全ての関係者が連携して取り組むべき問題である。

2 いじめ対策の組織

「いじめ問題」への組織的な取組を推進するために、「生徒指導会議（いじめ対策委員会）」を設置し、この組織が中心となり、教職員全員で共通理解を図り、学校全体で総合的ないじめ対策を行う。

(1) 構成員

校長、教頭、教務主任、生徒指導主任、学年主任、特別支援教育コーディネーター、養護教諭、当該学級担任、他必要により関係者（スクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカー等） ※協議する内容に応じて、組織の構成員は柔軟に定める。

(2) 役割

- ①いじめの未然防止に関すること
- ②いじめの早期発見に関すること(アンケート調査、教育相談 等)
- ③いじめ事案に対する対処に関すること
- ④いじめが心身に及ぼす影響、その他いじめの問題に関して、児童の理解を深めること

(3) 開催

- ①「生徒指導会議(いじめ対策委員会)」は、年度始めと年度末に開催し、基本方針の確認、見直しを行う。
- ②定例の情報共有は、職員会議の中で行う。
- ③いじめ事案発生時は緊急開催をする。

3 未然防止の取り組み

いじめ問題において、「いじめが起らない学級・学校づくり」を始めとする未然防止に取り組むことが最も重要である。未然防止の基本は、自己有用感や自己肯定感を育みながら好ましい人間関係を築き、確かな学力と豊かな心を育て、児童生徒が、規則正しい態度で授業や行事に主体的に参加・活躍できる学校づくりを進めていくことである。すべての児童生徒が活躍できる場面を作り出す視点で、「授業づくり」と「集団づくり」を見直すならば、トラブルが発生しても、それがいじめへとエスカレートすることもなくなってくるはずである。「居場所づくり」や「絆づくり」をキーワードに学校づくりを進め、すべての生徒に集団の一員としての自覚や自信を育て、互いを認め合える人間関係-学校風土を創り出していく。

(1) 学級経営の充実

- 基本的な生活習慣の確立を図るため、児童の実態に合わせた生活目標の設定や取り組みの評価をきめ細かく実施したり、「いじめアンケート」やQ-U検査の結果を生かしたりして、児童の実態を十分に把握し、よりよい学級経営に努める。
- 「わかる授業」の実践に努め、児童一人一人が成就感や充実感、自己有用感のもてる授業の展開に努める。

(2) 道徳教育の充実

- 教育活動全体を通して行う道徳教育を通して、児童の自己肯定感を高めるとともに、道徳教育の要となる道徳の授業の中で未発達な考え方や道徳的判断力の低さからおこる「いじめ」を未然に防止する。
- 「いじめをしない」「いじめを許さない」という強い心と助け合う豊かな心を育てる。
- 児童がいじめの問題を自分のこととして捉え、考え、議論することにより、いじめに正面から向き合うことができるよう、実践的な取組を行う。

○児童の実態に合わせて、内容を十分に検討した題材や資料等を取り扱った道徳の授業を実施する。

○全ての教育活動において道徳教育を実践し、人権尊重の精神や思いやりの心を育て、いじめを抑止する。

(3) 児童会活動・たてわり班活動の充実

○学校行事への主体的な運営参加や委員会活動への自主的な取り組みを進めるなど、児童の自発的な活動を支援する。

○たてわり班活動のなかで、協力したり協調したりすることを学習し、人とよりよく関わる力を身に付けさせる。

(4) 体験活動の充実

○児童が、他者や社会・自然との直接的な関わりの中で生命に対する畏敬の念、感動する心、共に生きる心を気づかせ、体得させるように体験活動を計画する。

○環境体験や自然体験、福祉体験、勤労生産体験など発達段階に応じた体験活動を体系的に展開した教育活動に努める。

(5) 保護者や地域へのはたらきかけ

○授業参観や懇談会の開催、学校・学年だより、HP等の広報活動により、いじめ防止対策や対応についての啓発を行う。

○PTA 総会や各種 PTA の会合において、いじめの実態や指導方針などの情報を提供し、意見共有をする場を設ける。また、必要と認められる場合はその構成者の一部に対して協力依頼を行う。

○インターネット使用のルールやモラルについての啓発や研修を行い、ネットいじめの予防を図る。

4 早期発見の取り組み

いじめは、早期発見が早期解決につながる。早期発見のために、日頃から教職員が児童との信頼関係を構築することに努めることが大切である。

いじめは、教職員や大人が気づきにくいところで起きており、潜在化しやすいことを認識する必要がある。児童たちの些細な言動から、小さな変化を敏感に察知し、表情の裏にある心の叫びを敏感に感じ取れる感性を高め、いじめを見逃さない力を向上させることが求められている。

日頃から、児童が示す変化や危険信号を見逃さないようアンテナを高く保つようにする。

定期的なアンケート調査や教育相談の実施により、児童がいじめを訴えやすい体制を整え、実態把握に取り組む。また、アンケートによっていじめの事実を把握する例が多いことから、児童に対して、いじめの傍観者とならずに、いじめ対策委員会への報告をはじめとするいじめを止めさせるための行動をとる重要性を理解させるように努める。

また、児童に関わることを教職員間で共有し、保護者とも連携して情報を収集するよう努める。

早期発見のための手立て

- (1) アンケート調査
- (2) 学習ノート、生活ノート、日記、連絡帳
- (3) Q-U 検査の実施と考察
- (4) 個人面談
- (5) 個別懇談
- (6) 日々の観察
- (7) 保健室の様子
- (8) 本人からの相談
- (9) 周りの友達からの相談
- (10) 保護者からの相談
- (11) 地域の方からの情報

5 いじめへの対処

(1) 基本的な考え方

- ・ いじめの発見・通報を受けた場合には、特定の職員で抱え込まず、速やかに組織的に対応する。被害児童生徒を守り通すとともに、教育的配慮の下、毅然とした態度で加害児童生徒を指導する。その際、謝罪や責任を形式的に問うことに主眼を置くのではなく、社会性

の向上等，児童生徒の人格の成長に主眼を置いた指導を行うことが大切である。教職員全員の共通理解の下，保護者の協力を得て，関係機関・専門機関と連携し，対応に当たる。

(2) いじめを発見・通報を受けたときの対応

いじめを認知した教職員は，その時に，その場でいじめを止めるとともに，いじめに関わる関係者に複数の教職員で事情を聞いて正確な事実確認をする。それをもって，該当児童の学級担任・学年主任・生徒指導主任に連絡し管理職に報告する。その後，「生徒指導会議」に諮り指導体制及び指導方針を決定し，すべての教職員と共通理解を図る中，対応する教職員の役割分担を決めていく。また，認知されたいじめが，犯罪行為として取り扱われるべきと認められる場合は，学校の設置者と連絡を取り所轄警察署と相談する。さらに，そのいじめが「重大な事態」と判断された場合は，「緊急対応会議」を開催し協議すると同時に，設置者の指示に従って必要な対応をとっていく。

(3) 被害児童及びその保護者への対応

- ・児童に対しては，事実確認とともに，児童のつらい気持ちを受け入れ，共感することで心の安定を図り，学校が児童を守ることや秘密を守ることが伝え，問題が必ず解決できる希望が持てることを伝えて安心感を持たせる。加えて，自尊感情を高められるよう，自信を持たせる言葉をかけていく。
- ・保護者に対しては，いじめを認知したその日のうちに，家庭訪問等で保護者と面談し事実関係を直接伝える。そして学校の指導方針を伝え，今後の対応について協議する。合わせて，継続して家庭と連携を取りながら解決に向けて取り組むことを伝え，家庭での児童の変化に注意してもらい，些細なことでも相談してもらえるように協力を依頼する。

(4) 加害児童への指導及びその保護者への助言

- ・児童に対しては，いじめた気持ちや状況等について詳しく聞き，児童の背景にも目を向け指導する。また，心理的な孤立感や疎外感を与えないようにするなど，一定の教育的配慮のもと，毅然とした対応と粘り強い指導を行い，いじめが人として決して許されない行為であることやいじめられる側の気持ちを認識させる。
- ・保護者に対しては，正確な事実関係を説明し，いじめられた児童や保護者のつらく悲しい気持ちを伝え，よりよい解決を図ろうとする思いを伝える。さらに，「いじめは決して許されない行為である」という毅然とした姿勢を示し，事態の重大さを認識させ，家庭での児童の変容を図るための今後の関わり方等，具体的な助言をしながら指導を依頼する。

(5) 集団への働きかけ

- ・当事者間の問題だけにするのではなく学校全体の問題として考え、いじめの傍観者からいじめを抑止する仲裁者への転換を促す。そのために、すべての教職員が児童に対して、「いじめは決して許さない。」という毅然とした態度を示す。次いで、児童がいじめを見つけたときに「はやし立てる」や「見ぬふり」は、いじめの肯定であること。「いじめを訴える」ことは、正義に基づいた勇気ある行動であることを理解させていく。

(6) ネット上のいじめへの対応

- ・インターネット上で拡散してしまった情報を消去することは極めて困難であること、一つの行為がいじめの被害者にとどまらず学校、家庭及び地域社会に多大な被害を与える可能性があることなどを考慮して、対策を検討する。ネット上の不適切な書き込み等については、被害の拡大を避けるため、直ちに削除する措置をとる。
- ・早期発見の観点から、ネットパトロールなど、インターネット上のいじめに対処する体制を整備する。

(7) いじめ解消の判断基準

- ・いじめは単に謝罪をもって安易に解消とすることはできない。いじめが解消しているという状態は、「いじめに係る行為が止んでいること」「被害児童生徒が心身の苦痛を感じていないこと」の2点の要件が満たされているものとする。
- ・これらの要件が少なくとも3か月を目安に継続していることを確認し、判断する。同時に、再発を防止する観点から、日常的に注意深く観察をすることとする。

6 重大事態への対処

- ・重大事態とは、いじめにより児童等の生命、心身又は財産に重大な被害が生じた疑いがあると認められるとき、いじめにより児童等が相当の期間学校を欠席することを余儀なくされている疑いがあると認められるとき、これらについては因果関係が認められなくとも、因果関係が存在する可能性があれば、「重大事態」と捉える。
- ・児童や保護者からの申し立てがあった場合には、学校が把握していない極めて重要な情報である可能性があることから、調査をしないままいじめの重大事態ではないと断言できないことに留意しなくてはならない。
- ・重大事態発生時又は疑いがあるときは、直ちに設置者である教育委員会に報告し、指示を受けながら連携し、調査、対処をしていく。

7 その他の留意事項

(1) 組織的な指導体制

いじめへの対応は、校長を中心に全教職員が一致協力体制を確立することが重要である。一部の教職員や特定の教職員が抱え込むのではなく、情報を共有し、組織的に対応することができるよう、平素からこれらの対応の在り方について、全ての教職員で共通理解を図る。

(2) 児童への細かな配慮

いじめを未然に防止するため、児童の多様性に配慮する必要がある。特に、発達障害を含む障害のある児童、海外から帰国した児童や外国人の児童、国際結婚の保護者を持つなどの外国につながる児童、性同一性障害や性的指向・生自認に係る児童、東日本大震災により被災した児童又は原子力発電所事故により避難している児童等には、日常的に特性を踏まえた適切な支援を行う。

(3) 校内研修の充実

いじめをはじめとする生徒指導上の諸問題等に関する校内研修を行う。

(4) 校務の効率化

公務の効率化を図り、児童と向き合う時間を確保する。

(5) 学校評価の活用

いじめの実態把握及びいじめに対する処置を適切に行うために、学校評価に「いじめに関する取組」を加え、PDCA サイクルに基づき評価・改善していく。

(6) 地域や家庭との連携

ホームページや学校だよりを通して、学校での教育活動を地域・家庭に発信し、学校に対して理解と信頼を得られるようにしておく。

8 いじめ防止指導計画

いじめの未然防止や早期発見のために、学校全体で組織的・計画的に取り組む。年度当初に年間の計画を確認し合うとともに、組織体制を整える。

	4月	5月	6月	7月	8月	9月
会議	<ul style="list-style-type: none"> ・職員会議 ・生徒指導会議 <li style="padding-left: 20px;">基本方針確認 ・PTA 総会 	<ul style="list-style-type: none"> ・職員会議 <li style="padding-left: 20px;">情報共有 	<ul style="list-style-type: none"> ・職員会議 <li style="padding-left: 20px;">情報共有 ・学校評議員会 	<ul style="list-style-type: none"> ・職員会議 <li style="padding-left: 20px;">情報共有 	<ul style="list-style-type: none"> ・職員会議 <li style="padding-left: 20px;">情報共有 ・校内研 Q-U 検査結果分析 	<ul style="list-style-type: none"> ・職員会議 <li style="padding-left: 20px;">情報共有
防止対策	学級づくり・人間関係づくり・縦割り活動・体験活動					
早期発見	個別懇談 家庭との連携	・Q-U 検査	・いじめアンケート	学級・学年懇談会		
	日々の観察					
	10月	11月	12月	1月	2月	3月
会議	<ul style="list-style-type: none"> ・職員会議 <li style="padding-left: 20px;">情報共有 	<ul style="list-style-type: none"> ・職員会議 <li style="padding-left: 20px;">情報共有 	<ul style="list-style-type: none"> ・職員会議 <li style="padding-left: 20px;">情報共有 	<ul style="list-style-type: none"> ・職員会議 <li style="padding-left: 20px;">情報共有 	<ul style="list-style-type: none"> ・職員会議 <li style="padding-left: 20px;">情報共有 	<ul style="list-style-type: none"> ・職員会議 <li style="padding-left: 20px;">情報共有 ・生徒指導会議 <li style="padding-left: 20px;">基本方針 <li style="padding-left: 20px;">見直し確認
防止対策	学級づくり・人間関係づくり・縦割り活動・体験活動					
早期発見		<ul style="list-style-type: none"> ・Q-U 検査 ・いじめアンケート 	個別懇談 家庭との連携 ・学校評価		学級・学年懇談会	<ul style="list-style-type: none"> ・いじめアンケート
	日々の観察					

※事案発生時には、随時、生徒指導会議（緊急対応会議）を開催する。